



201103111446

Re-Start for the future

Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology

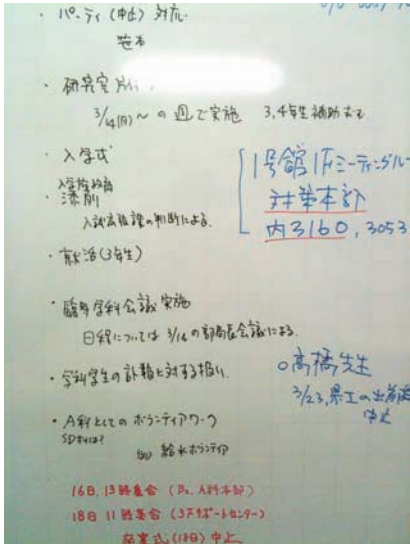
1. 建築学科災害対策本部立ち上げ

3.11 14:46 地震発生。学内にいた教職員、学生は中庭に避難しました。建物内、家具転倒等の被害はありましたが、学内での負傷者はありませんでした。強い余震が続く中、在学者の無事の確認が続きました。地震当日から数日間、避難してきた地域住民とともに学内で過ごした建築学科の学生も大勢いました。出張先の東京等で地震にあった教員もいました。2週間のヨーロッパ研修旅行に出かけていた建築学科の学生と教員の一行は帰国の途につくパリの空港で日本の地震のニュースを知ったそうです。地震翌日の朝 10 時に成田空港に到着し、地震の中、奇跡的に迎えに来てくれたバスに乗って、仙台まで戻ってきました。仙台に着いたのは 3.13 早朝。18 時間かけての帰路だったそうです。



地震直後、中庭に避難する教職員と学生。強い余震が続く。後ろには建築学科の建物。

翌日に立ち上がった建築学科の震災対策本部。懸命の安否確認作業が続く。一名一名の安否を確認。



手書きのホワイトボードがその状況を物語る。

3.12 AM 大学の災害対策本部の立ち上げ (3.16) に先立ち、いち早く建築学科では災害対策本部が立ち上がりました。停電・断水、交通手段、ガソリン、食料もない中、在仙の建築学科の教職員が大学に出勤し、手分けをしながら学生の安否確認、今後の対応にあたりました、3 日後には約 7 割、そして 5 日で約 550 人、建築学科の学生・大学院生ほぼ全員の安否を確認し終えたそうです。その時点で、安否だけではなく、自宅などの被害の状況までもが確認されました。でも…停電で大学のサーバーも数日間止まっていた状況の中で、どのように安否確認を進めたのでしょうか。

大学で数日間過ごした学生も多数。避難所・給水所となった大学では、支援物資の配給や水の運搬などで学生が大きく貢献。



地震翌日、自宅の停電が解消された教員が、自宅から全学生にメールを送って連絡を取り、連絡が取れない学生には学生間のネットワークを使って確認してもらいながら、その情報を学科の対策本部と共有しながら作業が進められたそうです。

私たち学生も先生とメールで連絡を取り合いながら、またお互いに友人の安否を確認し合って情報を収集し、共有しました。大学に避難していた学生は、支援物資の配布や給水所での手伝いなどで貢献しました。

2. 建築学科教員によるキャンパスの安全確認

地震発生翌日から、建築学科の構造系の教員を中心に、キャンパス内のすべての建物、工大高校の建物の構造上の安全確認が行われました。建築学科の本領発揮です。さすが頼りになります。構造専門の先生が「安全だ」と言ってくれることの安心感は計り知れません。建築構造の専門を持たない大学では、建物の安全性がすぐに確認できずに、長い間建物に入れなかった大学もあるそうです。建物の安全が即座に確認されたからこそ、翌日から災害対策本部が建築学科内に立ち上げられたとも言えるでしょう。

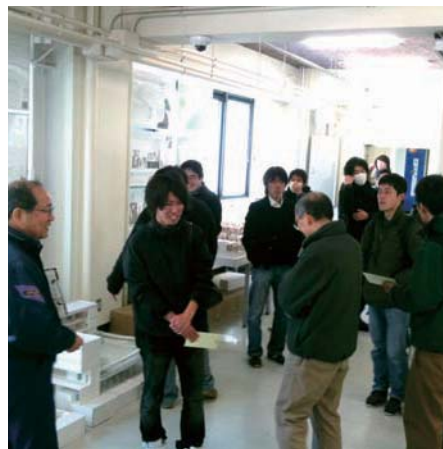
今回、巨大地震にもかかわらず、建物の使用に支障をきたすような大きな被害はありませんでした。長年にわたり建築学科が率先して大学とともに行ってきた継続的な建物の耐震化のお陰だということですが、その話は後に。



建築学科教員による建物の安全点検。全部の建物を隅から隅まで確認した。写真は建築学科の建物を守った鉄骨ブレース。

3. 卒業式

震災により予定されていた卒業式(3.18)は残念ながら中止に。建築学科では4年生と大学院修了生全員と連絡を取り、大学に来られる人を対象に「建築学科卒業式」を行うことにしました。大学までの移動も困難な中、45人が大学に集まりました。震災の影響で卒業証書の印刷が間に合わず、この日は卒業証明書の授与で祝福。わたしたち後輩も何名か参加し、大きな拍手で送り出しました。涙をこらえながらも、これからの決意を語る先輩方に勇気をもらいました。ささやかながらも、とても心温まる卒業式でした。卒業式も、卒業パーティーもできず、仲間や先生との別れの言葉も十分に交わせない中での卒業式となりました。3月の終わりには学科長名で新生活を迎える卒業生・修了生全員に、はなむけの言葉と励ましのメッセージがメールで送られました。



3.18 卒業式。雪が残る寒い日だったが、好天に恵まれる。久しぶりに会う仲間、先生との時間。
卒業証書に代わり卒業証明書の授与。地震時の状況などを一人ひとり聞きながら、卒業のお祝いの言葉とエールを贈る。
学科内の時計は地震のあった時を示したまま止まっている。

各自が自主的にボランティアに参加。炊き出しや建物の危険度判定の作業補助、泥かきや片づけなど、それぞれができることを行った。自治体から感謝状をもらった学生も。



4. 教育の空白を埋める取り組み

震災の影響で新学期の開始は1カ月遅れました。その間、わたしたち学生はそれぞれの時間を過ごしました。長く避難所での生活を余儀なくされたもの、家の片づけに追われたもの、各地でのボランティア活動に携わったもの、さまざまです。



学内ではビデオによる教育支援。多くの学生が大学に通って、自主的な勉強を行った。



その間の教育の空白を埋めるために、建築学科では3つのプログラムを用意してくれました。1つ目は自主的なボランティア活動の支援。2つ目は学内でのビデオを使った教育プログラム。3つ目は建築インターンシップの支援です。ボランティア活動には約90名が参加、学内で行われた学習支援プログラムには延べ163名(実人数67名)が参加、そして多くの設計事務所・建築会社の協力により実施された2週間のインターンシップには約30名もの学生が参加。教育の空白をつくらないという大学、そして学科の理念が貫かれた1カ月でした。



多くの学生がインターンシップにも参加。東京で行われた日建設計でのインターンシップには20名弱の学生が参加。



他の大学生とともに作業し、2週間の最後には成果発表も。

被災地の建物被害調査、避難所での調査など、学術的な調査の実施。調査に合わせて訪れた避難所に絵本の寄付なども。学生も被害調査に参加し、研究活動をスタート。

5. 復興に関わる精力的な活動

震災直後から、建築学科の教員はさまざまな調査活動に参加したそうです。震災翌日から被災地を回っての建物被害調査、避難所を回っての調査など、厳しい環境の中、精力的に調査が行われました。日本建築学会の初動調査の中心を担ったのが本学の教員だったそうです。研究室によっては、学生も一緒に関わりながら震災に関する調査研究にいち早く取り組んでいます。

また、建築学科では、これからの各地域の復興を支えるために「復興支援室」を立ち上げて始動させました。石巻市の復興計画への関わりを始め、東北工大の建築学科が持っている英知と技術を終結させて、被災した自治体や地域、人々の暮らしの復興に貢献できる体制を整えたそうです。

それぞれの先生方も、被災各地で専門を活かした活動や復興のサポートを直接・間接的に行っています。まさに今、東北工大建築学科の力が社会から必要とされ、その底力が発揮されていると感じました。



教員の支援が被災地の復興に貢献。(河北新聞 2011.6.16)



おそらく世界で最も早く行われた学科教員による海外での地震報告会(中国)。立ち見が出るほどの盛況。

キャンパス内には各所での地震の爪痕が。ただ、建物の使用に影響するような大きな被害はなし。



書棚等の転倒被害が大きかった建築学科の5階。ドアがふさがれて出られずベランダから避難。学生の力も借りての復旧作業。

「3.11 建築学科の建物で経験した地震」

3.11 震災当日、わたしは建築学科のある建物の2階にいました。かなりの揺れを感じましたが建物には致命的な損傷がありませんでした。後に知ったところでは、近隣のT大学の建築学科の建物が大破し、使用不可となったそうです。同じ建築学科の建物なのに、さらに、1978年の宮城県沖地震で同じく損傷し、その後同じく補強したのに、何でもかも建物の運命が違うのでしょうか。答えは簡単です。本学の建築学科の建物はあらゆる手段を使い補強してきたからです。わたしは、地味だけれども、着実に構造物を繰り返し補強し続けてきた本学の建物にいて大変良かったと思いますし、それを担うこの建築学科で勉強できることも誇りに思っています。今回の震災の経験、そしてこの大学で学ぶことは、将来、とても役に立つものと思っています。

(建築学科4年 渡辺太一)

6. 巨大地震に耐えた建築学科の建物

築40年の建築学科の建物。その揺れは相当なものだったそうです。特に5階の揺れはすさまじく、固定されていた本棚も倒れ、やっとの思いで部屋から脱出・避難した先生もいたそうです。

しかし、建物自体はこの巨大地震でもびくともしませんでした。度重なる継続的で確実な耐震補強が実施されてきた成果です。1978年の宮城県沖地震以降、建築学科の教員が主導して、着実にキャンパスの耐震化を進めてきたそうです。その象徴が、私たちが入る建築学科の建物です。

私たちの建物は、間違いのない構造的解析と最新の技術により、近隣のどの大学にも勝る安全な教育環境が保障されていたことに誇りを感じます。その建物と取り組みは、有名な建築の雑誌の表紙を飾り、大きく紹介されました。全国的にも注目を浴びる建物で学べる喜び、そして、建築学のおもしろさと価値をあらためて再確認しました。



継続的で間違いのない耐震補強の成果が日経アーキテクチャ(2011.5-11号)で紹介される。表紙を飾るのはわれら建築学科の建物。「補強の継続は力なり」と紹介されている。

私たち学生からみた 3.11

東北工業大学建築学科の教員・学生・建物の 3.11

3.11 の 14:46。春休みに入っていたということもあり、わたしたち学生の多くは実家や自宅にいました。先生や仲間と連絡を取り合い、互いの安否を確認しあつて過ごした最初の 1 カ月。仲間全員が顔を合わすことができたのは震災から 2 カ月たった 5.9。キャンパスは地震の爪痕を残しながらも、前と変わらぬ姿でわたしたちを迎えてくれました。建築学科の建物も巨大地震が襲ったことを忘れるほど悠然と、堂々と建っていました。仲間の元気そうな顔を見て、ホッとした気持ちになりました。

わたしたちにとって空白の 2 ヶ月間。この間、大学では何が起こっていたのか、先生方は何をされていたのか。とても気になって今回の取材に臨みました。

これからの未来、東北の各地域の復興の中心で汗をかくのは、わたしたちの世代だと思います。いや、そうならなければならないのだという思いを新たにしています。建築を学んでいることに誇りも感じるようになりました。一生懸命、この東北工業大学で建築を学んで、これからの社会で役に立つ力を身につけたいと強く思います。

このパンフレットが東北工業大学建築学科の 3.11 の記録となり、また未来に向けてのスタートとなることを願っています。

今回の震災で建築学科では残念ながら在学生 2 名、入学予定者 1 名が犠牲になりました。この場を借りて心からご冥福をお祈り申し上げます。

取材・編集・デザイン 二戸菜津紀

発行者 東北工業大学工学部建築学科

発行日 2011 年 6 月 25 日



創造から統合へー 仙台からの発進

東北工業大学

建築学科